

## 二人制での驚きの出来事

2024/11/16

走者1塁、打者が左翼手の右(センター側)に大飛球を打った。左翼手は打球に向かって必至に背走。セカンド前に位置していた塁審は、2・3歩、2・3塁線の方に近づき打球判定しようと打球を注視、そして「キャッチ」をコールした後、次のプレイを想定して1塁方向に駆け寄った。その時、2塁に走って行く1塁走者とすれ違った。これから1塁走者のリタッチを確認しようとする前の出来事であった。よって、1塁走者の1塁リタッチは勿論確認できていない。打球が捕球されたら1塁走者はハーフウェイから1塁に戻ってリタッチし、2塁に走るものという野球常識が通用しなかったことになる。1塁走者は捕球されるだろうと予想し1塁ベースからタッグアップしたとしか考えられない。このようなケースでは、塁審は打球判定し、直後に走者のリタッチを確認できない場合は、球審が補助的に1塁走者のリタッチを見なければならないことを肝に銘じておかなければならない。今回は、リタッチのアピールが来たら、球審とアイコンタクトしてサインを送ろうと考えていたが、幸いにアピールはなかった。

## サヨナラタイムリー

2024/11/23

最終回の裏、6対4とリードされていた後攻チームの攻撃は、1点を返して6対5として、2アウト走者2・3塁となり、球審は2アウト、ステイ、タイムプレイのサインを塁審と確認して、次の打者を迎えた。打者は右中間を抜けるタイムリーヒットを打ち、タイムプレイの心配もなく3塁走者に続いて2塁走者もホームインし6対7と逆転した。ここで、審判員として留意しなければならない事は、安易に選手たちに集合をかけてはいけないという事である。何故なら2塁走者の3塁アピールの可能性が残されているからだ。

「瓦版 No,16 2024/7月号」で紹介した「このジャッジ厳しいでしょうか？」これは、私が試合を終えて帰宅しようとしたときに電話をかけてきた友人の事について書いたものである。野球規則通りに試合を進行させたにもかかわらず、「そんなルールがどこにあるんだ」と周りの指導者から非難を浴びせられたそうである。この事に心を痛め、いたたまれなくなって電話をかけてきたことは、容易に推察できる。後で、この友人は、このルールが規則書のどこに掲載されているか丁寧にLINEを送ったそうである。

現在の野球規則では、「5.10（プレーヤーの交代）(j)交代の発表のなかったプレーヤーの取り扱い」は、以下のような記述になっている。

「代わって出場したプレーヤーは、たとえその発表がなくても、次のときから、試合に出場したものとみなされる。

- (1) 投手ならば、投手板上に位置したとき。
- (2) 打者ならば、バッターボックスに位置したとき。
- (3) 野手ならば、退いた野手の普通の守備位置についてプレイが始まったとき。
- (4) 走者ならば、退いた走者が占有していた塁に立ったとき。

本項で出場したともものと認められたプレーヤーが行ったプレイ、およびそのプレーヤーに対して行われたプレイは、すべて正規のものとなる。」

(波線は筆者が記したもの)

この波線がルールに採用された事件について、「わかりやすい公認野球規則 1992 鈴木美嶺・郷司裕編」の記述を紹介すると

「1979年の米大リーグ、ニューヨーク・ヤンキースとデトロイト・タイガースの試合の途中、攻守交代のときにヤンキースのクリス・シャンブリス一塁手が“用具の修理”のためにクラブハウス(ロッカールーム)にひっこんでいるあい

だに、ルー・ピネラがダッグアウトから駆け出してきて一塁手をつとめ内野手を相手に守備練習をしていた。プレイ再開になる前にジャンプリスがもどって一塁の守備について、球審が“プレイ”を宣言したが、そのとたん、タイガースのスパークー・アンダーソン監督が「ピネラがひっこんだジャンプリスの守備位置についてと同時にピネラが自動的に新しく出場した一塁手になるはずだ」と抗議した。球審はこの抗議を認めなかったのだが、これからも同様の抗議が起こるかもしれないことを予想して、米国ルール委員会は、1980年からルールブックに「プレイがはじまったとき」という但し書きを加えたというわけである。」日本規則委員会は1981年にこの改正ルールを採用した。

野手の交代だけが、「プレイが始まったとき」という条件が付いているのは、我々が裁く試合でも、代わりの捕手が投球を受ける場合がよくあることから納得がいく。しかし、投手は投手板上に位置したとき出場したものとみなされるのである。ルールに記載されている事項は、なあなあで済まされるものではなく、審判員も選手も守るべきものである。それを厳格に遂行しようとした審判員が非難されるべきではない。

いやな思いをした友人は、ルールを知らない者からの誹謗中傷にめげず、他のリーグの監督会議で、このようなことがないよう選手に徹底してもらうことを呼びかけたそうである。身近にこのような審判員がいてくれて、共に試合に臨むことができることに感謝する。

### 大リーグで試験的にロボット審判導入

2025/2/20

今年、大リーグのオープン戦でロボット審判を試験的に導入するというニュースが日本時間の2/20に流れた。チャレンジできるのは、打者、投手、捕手で、監督はできないそうである。各チームとも1試合2回までチャレンジでき、米国時間の20日に行われるドジャース対カブスのオープン戦から使用される。チャレンジするときはヘルメットを触って申告し、ロボットの判定が出

るまでに 30 秒くらいかかるらしいが、実際にレギュラーシーズンの導入については未定との発表である。さて、投球判定をロボット審判にチャレンジが可能となり、ストライクゾーンにどのような影響が出るのだろうか？多少なりとも我々の野球にも影響は出るかもしれない。

MLB の試合では、近年、投球時にベース上にストライクの長方形の枠が表示されるようになった。視聴する我々にとっては、この枠によってストライクを確認しやすくなっているのだが、枠に触れている投球をストライクと球審が判定した場合でも打者が怒り狂ったように抗議をして退場を宣告されている場面をよく見る。我々はコンピュータの判定が全て正しいと思いがちであるが、はたしてそうであろうか。野球のルールが制定された 1845 年から今日まで 180 年間かけて選手と審判員がつくりあげてきたストライクゾーンをコンピュータ（ロボット）によって否定されていくようで何か納得がいかないと思うのは私だけであろうか。

#### イチローが米国でも野球殿堂入り

2025/2/22

2月22日（日本時間）、イチロー氏の米国野球殿堂入りが発表された。全米野球記者協会に10年以上在籍する記者の投票で99.7%を獲得し、日米共に殿堂入りとなったことが報道された。メジャーリーグでの彼の活躍は、2001年の1年目から242安打、打率.350、盗塁56をマークし、MVP、新人王、首位打者、盗塁王、ゴールドグラブ賞受賞と活躍し、マリナーズがメジャーリーグ最多タイ記録のシーズン116勝（46敗、勝率.716）をマークする原動力となり全米の野球ファンを驚かせた。翌年以降もシーズン200安打以上を2010年まで10年間も続けた功績が評価されたものである。彼は打撃について5通りの打ち方をするといわれヒットを量産してきた。1つ目は半分走りながら片手で打つ、2つ目はボールに寄りかかりながら打つ、3つ目はなぐりつけるように流し打つ、4つ目はゴルフのチップショットのように打つ、5つ目は力強く引っ張るバッティングであるという。

このニュースが流れたとき、かつてのメジャーリーガー「ウィリー・キラー」の名が取り上げられた。さてどんな人物なのか私も初めて聞く人物なので少し調べてみた。彼は米国のニューヨーク出身で、1892年から1910年まで活躍した身長約164cmと小柄な選手だが巧みなバットコントロールで8年連続200安打以上を記録し、44試合連続安打記録を持っているヒットメーカーで、野球殿堂入りしている。彼はバントでファウルを重ね気に入ったボールが来るまで粘ってヒットにする戦術を得意としていた為、試合が長くなるということから、米国では1902年にルールが改正され、2ストライクからのバントのファウルはアウトとされるようになった。つまり、スリーバント失敗は打者アウトのルールができたのである。

#### とんでもない MLB の映像

2025/3/1

仲間の審判員たちと見た映像に、MLBの不可解なプレイが映し出されていた。ナショナルリーグのシカゴ・カブス対ミルウォーキー・ブルワーズの一戦、8回裏、4対5とリードするブルワーズの攻撃は、ノーアウト1・2塁、ボールカウント2ボール1ストライクで投手がセットポジションをとったとき、2塁走者が3塁へ盗塁しようとした。投手は3塁へ送球し、捕球した3塁手は2塁方向へ2塁走者を追っていった。2塁走者は2塁へヘッドスライディングで帰塁したが、すでに2塁には1塁走者が来ていた。3塁手は、まず2塁走者にタッグすると素早く1塁走者にもタッグし、さらに両手をついて立ち上がった2塁走者の足が塁から離れた瞬間に再度タッグした。この間に2塁ベースから2m程ダイヤモンドの内側にいた2塁審判員は1塁走者を左手でポイントしアウトを宣告している。二人の走者が塁上及びその付近にいる状態で、瞬間的に3つのタッグがなされたので、2塁走者へのタッグプレイについてはメカニックを入れる時間がなく発声のみでコールしたかは定かではないが、とにかく、映像を見る限り、メカニックは1塁走者に対するアウトだけである。そして、2塁走者への2度目のタッグプレイは完全に見落とされている。すると2

塁走者がアウトと思ったのか2塁を離れ1塁方向にゆっくり走って行き始めた。それに気付いた遊撃手は、3塁手のグラブからボールを抜くと2塁走者を追いかけて始めた。そのとき2塁方向を振り返った2塁走者は、慌てて1塁へ走り、1塁コーチの指示通りに1塁ベース上に立った。遊撃手はタイムを要求。映像ではここで2アウト走者1塁となっている。1塁走者は先程まで2塁走者であった選手である。そして、この元2塁走者は次の投球時に2盗を試みたが、捕手から2塁に入った2塁手のタグによって3アウトでチェンジとなった。

野球規則では5.09 b (10) 走者アウトの条項に以下の記述がある。

「走者が正規に塁を占有した後に塁を逆走したときに、守備を混乱させる意図、あるいは試合を愚弄<sup>ぐろう</sup>する意図が明らかであった場合。

この際、審判員は直ちにタイムを宣告して、その走者にアウトを宣告する。」

このルールができた背景について、「野球審判員マニュアル第4版」には以下のような記述がある。

「1911年デトロイト・タイガースとシカゴの試合。ツーアウト走者一・三塁。打者が打てそうもなかったため、一塁走者はダブルスチールを考えた。そして1球目に二塁へ盗塁したが捕手は二塁に送球しなかったため三塁走者は本塁に走れなかった。次の投球のとき、二塁にいた走者は一塁に向かって走った。捕手は見ていたばかりであった。そして、次の投球で一塁走者は二塁への盗塁をもう一度試み、捕手が二塁に送球する間に、三塁走者はホームを陥れた。記録員は盗塁の数に困ったが、結局盗塁1と記録された。

そして、翌年1912年逆走を禁止する規則が規定された。」

また、2015年MLBの改正で加わった【5.06 a・c 原注】には、「走者が塁を正規に占有する権利を得て、しかも投手が投球姿勢に入った場合は、元の占有塁に戻ることは許されない。」とある。

令和7年度のGブロック審判講習会での主な指導内容

2025/3/15

今年度の規則改正については、日本の野球に関する改正はほとんどなかったが、いくつかの事について説明があった。

※ バッターボックスルール（競技者必携 P82）

打者が9つの例外ルール以外にバッターボックスから離れないようにさせる規定である。打者がバッターボックスを離れた場合、球審は「タイム」をかけて、自分の顔の前の空間に大きく長方形を両手で描き、「バッターボックスルール〇回」とコールして打者に注意を与え、攻撃側ベンチにも同じようにコールする。3回目からは**ストライク**をコールする。

※ バントについて

バントの構えをした静止状態から投球に対してバットを引くことなく、ボールにかすりもしなかった場合は、スイングをとってはいけない。身体動作が伴い投球にかすらなかったバントはスイングをとる。

※ 挟殺プレイで二人の走者が同一塁に触れた状態で、タッグが行われた場合必ず、**セーフのコールを先に宣告**すること。最初のタッグがアウトの場合でも走者が勘違いして塁を離れることを防ぐ目的でセーフから宣告し、その後でアウトを宣告すること。

※ イニングの合間の投球練習時の球審の位置

球審は、本塁側のネクストバッタースサークル横に立って、次打者をこのサークル内に準備をさせ、その場から「ワン・モア・ピッチ」をコールすること。

以上の点が本年度の G ブロック審判講習会の説明では、記憶に強く残ったので掲載しておくことにした。

## 触球

2025/3/22

1 塁のホースプレイで、野手が倒れた状態ではあるが足をベースに触れさせて、打者走者が1 塁を駆け抜ける前に地面のボールを握ったプレイが生じ、セーフのジャッジをしたところ、守備側の監督から「アウトではないか」と抗議があり10分程揉めたそうである。

ルールブックの「打者アウト」の項目、5.09a(10)には、  
「打者が第3ストライクの宣告を受けた後、またはフェアボールを打った後、一塁に触れる前に、その身体または一塁に触球された場合。」

「走者アウト」の項目、5.09b(6)には  
「打者が走者となったために、進塁の義務が生じた走者が次の塁に触れる前に、野手はその走者またはその塁に触塁した場合。（このアウトはフォースアウトである）……」

とある。（上記または下記の波線は筆者がつけたもの）

では「一塁に触球された」とは、どのような状態をいうのか。

野球規則で、まず 定義 15 CATCH 「キャッチ」（捕球）を見てみよう。

「野手が、インフラインの打球、投球または送球を、手またはグラブでしっかり受け止め、かつそれを確実につかむ行為であって、帽子、プロテクター、あるいはユニホームのポケットまたは他の部分で受け止めた場合は、捕球とはならない。……」

定義 75 TAG 「タッグ」（触球）には、

「野手が、手またはグラブに確実にボールを保持して、その身体を塁に触れる行為、あるいは確実に保持したボールを走者に触れるか、手またはグラブに確実にボールを保持して、その手またはグラブ（ひもだけの場合は含まない）を走者に触れる行為をいう。



しかし、塁または走者に触れると同時に、あるいはその直後に、ボールを落とした場合は「触球」ではない。

……要するに、野手が塁または走者に触れた後、ボールを確実につかんでいたことが明らかであれば、これを落とした場合でも「触球」と判断される。……」

とある。今回のケースはキャッチ（捕球）ではなく、タッグ（触球）である。触球でアウトになる瞬間はどの時点だろうか、**ボールが地面に接している**でも**確実にボールをつかんでいればその時点である**。ボールを地面からつかみ上げた時点であるとはどこにも書かれていない。しかし触球直後に「ボールを落とした場合」は、**ボールが地面につかなくてもボールをつかんでいない**と判断すべきである。

ではコールの時点はいつが良いだろうか。野手がボールを握っていると多くの者が認める時点であろう。つまり握ったボールを地面から離れた時点なら明確であるからだ。しかし、審判員が、ボールが地面に接しているでも確実に握っていることが判断できればアウトであると考えている。

しかし、捕球の場合は地面に接した瞬間の打球、送球、投球をミットやグラブでつかんでも捕球とはならないので、しっかり区別すべきである。

では、打者走者の足よりも野手が一瞬早く手に握ったボールを1塁ベースに触球した場合はアウトであろうか？これは、ボールをミットやグラブでつかんだ状態でベースにタッグ（触球）すれば、アウトにしている。手で握ったボールをベースに触球する場合、わざわざボールを上にして手の甲をベースに付けなくても握ったボールをそのままベースにつければその時点でアウトは成立する。しっかり握っていることを確認するために、ボールをベースから離して握っていることをアピールしてくれると、多くの人は握っていることがわかる。アウトは握りを挙げた時点ではなく、ベースについた時点で審判員が握っていることを確認できていれば、それがアウトのタイミングである。